

「三井の晩鐘」で親しまれる三井寺（園城寺）は、大津市中央部の西端にそびえる長等山麓に伽藍を構えます。その園城寺から北に少し離れたところに、法明院があります。

法明院は、三井寺唯一の律院として、享保8年（1723）に義瑞律師性慶によって開かれました。本堂の阿弥陀如来は鎌倉中期、不動明王は藤原時代の作で、建物は唐破風入り母屋造りです。書院には、円山応挙の「山水図」（襖絵）や池大雅によって描かれた障壁画があり、多数の文書・典籍類を収蔵しています。

また、書院前には琵琶湖を見下ろすように池泉回遊式庭園が営まれています。その規模は山内の庭園の中では最大で、背後の山から流れる清水を引いて造った長方形の池を中心にして芝庭が広がっています。そこからは正面に琵琶湖や三上山（近江富士）が眺望できます。

庭園は、雄大な琵琶湖と三上山の風景を借景にした構造で、深い池があり、周りに芝生が貼られています。芝生からは四季折々の自然が楽しめます。大きな景石が配置されて

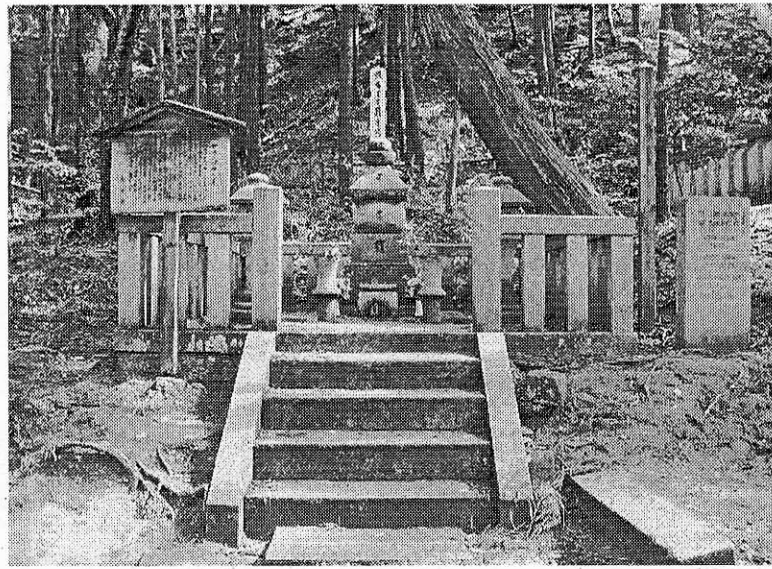
います。一方、池は石段を9段余り降りたところにあり、2つの中島が配されています。かつて庭園の池の東側は、展望台として利用されており、琵琶湖を一望できました。

この法明院の庭園を通り抜けた奥の山麓には、歴代の住職の墓があります。その一面に、明治の日本美術研究・収集家だったアーネスト・フランシスコ・フェノロサの墓があります。フェノロサは、日本美術の真価をアメリカ・ヨーロッパに紹介し、その振興に努め、東京美術学校を創設するなど、日本美術界の恩人と称される人物です。彼は1853年にアメリカ東海岸マサチューセッツ州セイラムで生まれ、ハーバード大学卒業後、エドワード・S・モースの紹介で、明治11年（1878）に御雇外国人教師として来日しました。

明治元年、西洋型近代化が加速するわが国では、それまでの価値観に混乱が生じ、明治政府の神仏分離政策にともなう廃仏棄釈運動により、多くの文化財が散逸し、破壊され、あるいは国外に流出する事態を招きました。

これらの危機に対処すべ

## フェノロサと法明院



法明院にあるフェノロサの墓

### 「日本美術の危機」救う活躍

く、明治政府は社寺の宝物類などの文化財の調査を開始し、明治21年（1888）には宮内省に臨時全国宝物取調局が設置され、専門家による本格的な調査が、社寺の所蔵する古文書、絵画、彫刻、美術工芸、書籍を対象に実施されました。

滋賀県での調査は、明治21年10月下旬から12月上旬まで実施されました。調査件数は実に7530点に及び、これらは現在の滋賀県の文化財（美術工芸品など）の根幹をなしているといえます。明治30年（1897）に制定された古社寺保存法に基づき、こ

も来日中に長く滞在した法明院の敬徳和尚像の傍らに埋葬されました。同院には彼が生前愛用した天体望遠鏡・地球儀・テールなどが今も大切に保管されています。

現在、境内から望む湖岸には高層建造物が林立し、フェノロサの時代とは大きく異なっています。しかし、落ち着いた境内のたゞずまいは、当時の面影をいまなおよく残しています。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 具志堅有紀）

れまでの調査成果から事実上の国宝指定が行われ、臨時全国宝物取調局による10年間の調査は、わが国の文化財保護行政の本格的な幕開けを告げる調査であったことが理解されます。同時に、フェノロサと天心によって「日本美術史」という学問が確立される契機となった調査でもありました。

フェノロサは三井寺（園城寺）法明院の時雨亭に滞在し、日本の仏教美術を理解するために、住職の桜井敬徳師に師事して仏得度を受戒しました。諦信と号しています。明治41年（1908）にロンドンで狭心症を患って急死すると、生前の遺志により、師敬徳ゆかりの地であり、自ら